

フィールド・ノート



里山で採取した草木で5×緑のポットを造る矢澤さん。「大きいポットだと2人がかりで1日1個つくるのがやっと」=茨城県つくばみらい市

東京・代官山の旧山手通り。街のシンボル「代官山ヒルサイドテラス」の一角

を、ポットの草花がさりげなく彩る。植わっているのは人工栽培の芝などではな

里山の植物で都市緑化

く、約130キロ離れた栃木県那珂川町(旧馬頭町)の里山に自生する草木だ。ヤマツツジ、クヌギにハクウンボク……。ノシランの白くかれんな花も顔をのぞかせる。「人が入らなくなりた里山を元気にして、都会の人にも昔からある植物を身近に感じてほしい」。この「5×緑」事業を手がける都市計画コンサルティング会社「アネックス」の富田生美さんは言う。

5×緑は、サイコロ型に組んだ金網に透水性のマツリーノの矢澤光一さん(47)。03年に事業が始まつた当初は種から育てた草木を植えていた。だが昨年、那珂川町で林業を営む友人の佐藤昭二さん(47)が所有する里山の草木も使うようになつた。

一边20センチのものを始め、サイズは様々。植物の多様性を知ってほしいと、いくつもの草木を組み合わせる。「里山では、木を切り下草を刈れば必ず新しい草木が芽を出す。こうして世系も、人の手が入らない今は風前の灯」と矢澤さん。佐藤さんは「山の魅力や価値が、都会で見直されるきっかけになれば」と話す。

他の地域の生態系を乱さないよう、ポットの販売は植生の似通つた関東とその近辺に限る。京阪神などでは、滋賀県の棚田を利用して育てた草木で作ったポットを供給する予定だ。

在来の植物を守り、中山間地の活性化も手助け、都会に緑の涼風をもたらす「一石三鳥」の試みは昨年、環境ビジネスのコンテストで賞を受けた。今年から事業の拡大と里山の生態系調査を目的に、慶應大との共同研究も始まつている。(森治文)



草木を保護 都会に涼風